

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 レンメンと続く歴史。
- 2 南半球ではまもなくウキに入る。
- 3 キシヤに乗って旅を試してみたい。
- 4 ショウタイ客と楽しく談笑する。
- 5 至極当然なことだと納得した。
- 6 波乱に満ちた物語。
- 7 リニューアルオープンで装いを新たにす。
- 8 植物に肥料をあたえる。

問二 次のア、エの漢字のうち、一つだけ部首が異なる漢字があります。その漢字を選んで記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| 1 | ア望 | イ朗 | ウ消 | エ朝 |
| 2 | ア上 | イ下 | ウ七 | エ千 |
| 3 | ア市 | イ冊 | ウ円 | エ再 |
| 4 | ア巢 | イ労 | ウ営 | エ巖 |
| 5 | ア底 | イ応 | ウ序 | エ府 |

二

次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

私は、本は基本的に買うことにしているので、図書館で借りることの方が少ない。しかし、図書館にも大きな効用がある。その最も大事なものは、マップをつくるということだ。図書館には様々な本がある。型どおりの分類かもしれないが、読書の初心者には、本の世界がどのような広がりをもっているのかを把握するには効率がよい。

私は今でも、小学校の図書館の本棚や大学の図書館の本棚の一部をぼんやりイメージすることができる。

置や背表紙を覚えている。手で触って開いてみただけでも馴染む。本棚の場所で覚えて、自分の心の中にすまわせる作業が、図書館ではしやすい。

著者名を知るだけでも大きな効用がある。一番大きな効用は、自分よりも教養や知識のある人と話がしやすくなるということだ。たとえば、ハイデガーやフッサールやメルロ・ポンティといった哲学者について、深く知るのには時間がかかる。

すっと入ってきたりする。よく知っている人から話を聞くためにも、その著者の名前と代表作くらいは知っている必要がある。名前も知らない人に丁寧に解説してくれるのは、職業的な教師だけだ。名前が出たときに、「ああ、あの人ね」というふう相槌を打てるだけでも、相手の話す気持ちは高められる。

私はパリに観光で二週間ほどいたことがある。東京ではよく方向音痴になるくせに、パリではほとんど地理的に混乱しなかった。というのも、はじめにインフォメーションセンターでパリの地図をもらい、それを常に携帯して頭の中に入れていたからだ。知らない街だからユダンせずにマップを頭の中につくっていった。地図をもつてまずエッフェル塔に上り、およその「X」を把握した。それと同時に、地下鉄網を把握した。その上、パリという街では、小さな通りにもしっかりと名前がついている。五十三号というような機械的な名前ではなく、「Y」のような覚えやすい名前がついている。これだけのマップづくりができていると、どこへ行くのにも不安がないので、どんどん動き回ることができる。

知的な世界も同じことだ。パリの地図をもらうのと、図書館の本棚を把握するのは同じことだ。歩き回って時々手に取ってみるだけで、徐々に知的世界のマップが作れる。

そのうえ図書館は、普通の書店と違い、品切れ本に強い。現在日本の出版界では、品切れが非常に速く起こっている。大出版社の大きなシリーズで

も、品切れは多い。古本屋や図書館には、品切れ状態のいい本を見る利点がある。

この知的な世界のマップづくりは、高校の終わりから大学の一、二年生でやっておくのが一番効果的である。その時期に馴染んでおけば、三十年代、四十代になって、改めていろいろな分野の本を読もうとしても、抵抗感が少ない。

ちなみに私が本は買って読むものだと言っ返すのは、読書文化が出版文化と結びついていくからだ。売れない本は、どんないい本でも品切れ、絶版になっていく運命にある。本の善し悪しと売れる売れないは直接の関係がない。素晴らしい本が次々に品切れになっている。本を読む力のない人が増えれば、濃い内容の硬い本が売れなくなる。

IV、そのような本は品切れになるばかりか、そもそも出版させてもらえなくなる。「積ん読のすすめ」ということがかつてはいわれた。それは、買って積んであるだけでも多少の勉強にはなるということだが、もう一つのねらいは、皆が自分が読める以上の本をたくさん買うことによって、出版界がいい本を維持できるからだ。ここでもう一度読書ブームを沸き起こし、出版文化Ⅱ読書文化のフクチヨウを望みたい。

(齋藤孝『読書力』より)

問一 部①③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 部A「本は基本的に買うことにしている」とありますが、なぜ筆者は「買う」ことにしているのですか、その理由を本文中より十五字以内でぬき出して答えなさい。

問五 本文中 I } IV にあてはまる語句として適切なものを、それぞれあとのア～カから選んで記号で答えなさい。

ア たとえ イ しかも ウ あるいは エ なぜなら オ すると カ しかし

問六 本文中よりと同じ用法で使われている「より」を、あとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 午後一時より、生徒会の会議を始めます。

イ 映画より演劇のほうが文化祭でやってみたい。

ウ よりよい学校にするために案を出し合う。

エ 大阪ではなく神戸よりの場所に家が建っている。

問七 — 部C「図書館は、普通の書店と違い、品切れ本に強い」とありますが、図書館以外に「品切れ本」に出会える場所を本文中よりぬきだして答えなさい。

問八 — 部D「素晴らしい本が次々に品切れになっている」とありますが、本文中に書かれているその理由として最も適切なものを、あとのア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア いい本は内容がとても素晴らしいため、多くの人が読みたいという気持ちになり本屋に殺到して購入するから。
- イ 近年デジタル化によって、電子書籍で本を読む人が増え、紙媒体が売れないので出版されなくなっていくから。
- ウ いい本は、内容は素晴らしいが、人々の本を読む力が低下し売れなくなったので出版を減らしているから。
- エ 新しくいい本がたくさん出版されるため、古くていい本は売れにくくなり、出版数を減らしているから。

問九 本文の内容を説明したものとして最も適切なものをあとのア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 著者名を知るだけでは本の内容や、そこから得られた知識がないので、やはり本は読まなければ全く意味が無い。
- イ マッピングは、自分の位置をつかむことで、不安がなくなり自由に動き回ることを可能にすることにつながる。
- ウ 売れない本には売れないだけの理由があるので、売れない本はいい本とは言えず、絶版になっていく。
- エ 出版社がいい本を維持していくためには、みんなが「積ん読」をやめて、読める分だけの本を買う必要がある。

三

次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

とげとげの白い金平糖こんぺいとうを、指で摘つままんで転がしてみる。まるで星屑ほしこずのような菓子だ。元は南蛮菓子なんばんがしらしいが、今やすっかり江戸えどに根付ねづいている感がある。

とはいえ今のお彩あやが気軽に手を出せる値でもない。最後に食べたのは、火事の前。卯吉うきちが少ない給銀の中から、お彩に買って来てくれたっけ。口の中で転がすとほんのり甘く、歯を立てるとほろほろ崩れていく金平糖。京橋川きょうばしがわの畔ほとりに二人で並び、儂ほかない甘さを味わった。

「金平糖は、どうして白ばかりなんでしょう」と首を傾かしげると、「お彩ちゃんはおかしなことを言うなあ」と卯吉は笑ったものだった。「ううん、美味しい」

「甘いー!」

かのやA——香乃屋の母娘きよとあいらくは喜怒哀楽が激しい。金平糖に苦い思い出がなくても、お彩はあんなふうにはしやげない。

「食べはらへんのですか?」

金平糖を眺ながめているだけのお彩に、右近うこんが声をかけてくる。物思いに沈しずんでいたせいで、唇くちびるからぼろりと吐ひきが洩もれた。

B「金平糖は、なぜ白いのかしら」

なにを口走くちっているのだろう。おかみさんとお伊勢いせにも声が届いたらしく、二人で顔を見合わせている。

「そりゃあ、白砂糖の色だろ?」

「砂糖なべを煮溶にかしたものを何度も鍋なべに回しかけて、この形になると聞いたわよ」

金平糖は平鍋へいなべに入れた芥子粒けしつぶに糖蜜とうみつを少しずつかけて混ぜ、それを十日ほども繰くり返して作られているという。小さな菓子一粒にかけられた手間暇ひまを思えば、値うなずが張はるのも頷うなずける。

白砂糖が白いのだから、金平糖も白くてあたりまえ。空はなぜ青いのかと尋たずねるようなものだ。「おかしなことを言う」と笑った、卯吉の声がよみがえる。

「へえ。なんてそう思わはったん?」

思いがけぬ問いかけが聞こえた。ハツとして顔を上げると、右近が興味深そうに手元を覗き込んでくる。お彩はつい、しどろもどろになってしまった。

「その、色はつけられないのかと。最後に加える糖蜜に、たとえば梔子や露草の色を混ぜて——」

「つまり、黄色や青の金平糖ができないかってことかい？」

「ええ、まさにそれです」

おかみさんが助け船を出してくれ、お彩は頷く。

「それをひと色ずつ売るんじゃないかと、白、黄、青と混ぜて売ったら——」

「絶対可愛い！」

金平糖の入った蓋物を見下ろして、黄色い声を上げたのはお伊勢だ。右近が「なるほど」と顎先を撫でる。

「できるかどうかは職人に聞いてみな分かりませんが、面白そうですな」

「おかしなこと」が「面白そう」になった。そんなふうに言われたのははじめてで、右近の狐面にまじまじと見入ってしまう。どうやら本心から出た言葉らしい。

「せや、お彩はん。その面白さで、わてのお友達に力添えしてくれまへんやろか」

「力？」

これまでなら、なにも聞かずに断っていただろう。だがお彩は少しくらい、右近の話に耳を傾けてもいいかという気になっていた。

「へえ、実は来月大きい茶会があるそうで。その主菓子をいくつかの菓子屋に競わせて選ぶことに決まったゆうて、お友達はどうゆうお菓子を作ったらええやろかと、ずっと悩んでありますねや」

大きい茶会というと、来月なら炉開きか口切りだろう。その程度の知識はあるが、茶会などお彩には縁のない話だ。

「私、上菓子なんか食べたことはありません」

餅菓子や団子などは違い、白砂糖をふんだんに使い意匠にも凝った上菓子など、庶民の口には入らない。米ならば今年豊作らしく一両で八斗

ほども買えるところを、ある店の上菓子の色とりどりに詰められた四段重は、なんと六十両もするらしい。

そんな上菓子屋を数店競わせようというのだから、依頼元はどれほどのお大尽だ。茶の作法すら知らぬお彩に、ますます出る幕はない。

「構しまへん。上菓子で大事なんは、味以上に見た目です。お彩はんは特に、色について意見してくれはったら充分や」

たかだか金平糖の色について言及しただけで、ずいぶん買い被られたものだ。自分には身に余る。そう思う一方で、面白そうだと胸が躍っていたりもする。

お彩よりも、お伊勢が手を叩いて喜んだ。

「すごい。やってみなよ、彩さん」

「もちろんタダでは言いまへん。せやなあ、お友達の菓子が選ばれた暁には、五十出しまひよ」

当のお彩が黙っているの、右近は金の話まで持ち出した。右手の五指を開き、突き出してくる。

「五十文、ですか」

子供の小遣いに毛が生えた程度のものだ。それでもあればありがたい。たしか醤油の買い置きが切れかけていた。

ところが右近が示した額は、お彩の想像の域を超えていた。

「いいや、銀五十*2 匁2です」

金にすると、一両近い。

D ひゅつと喉の奥が鳴る。続いてお彩は激しくむせた。自分が菓子を作るわけでもないのに、銀五十匁なんて馬鹿げている。こんな話に、裏がないはずはない。

「大丈夫でつか」

E 「お断りします」

背中をさすろうと伸ばされた、右近の手を振り払う。お彩は咳が止まるのを待ってから、きっぱりと返事をした。

(坂井希久子「色にいでにけり」より)

*1斗 容積の単位。一升の十倍で約十八リットル。

*2匁 小判一両の六十分の一を表わす単位。現代の価値では、一匁≒約七百五十円。

問一 ――部①～③の本文中における意味として適切なものを、あとのア～エの中からそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

① 黄色い声

ア とまどいの声

イ 不満をこめた声

ウ 太く低い声

エ かん高い声

② 意匠にも凝った

ア 金額もとても安い

イ 派手にかざった

ウ 造形にも工夫した

エ 長い時間をかけた

③ 暁には

ア 早朝には

イ 夜には

ウ その時には

エ その前には

問二 ――部A「母娘」とありますが、誰のことですか。その人物として適切な人物をあとのア～オから二つ選んで記号で答えなさい。

ア お彩

イ 卯吉

ウ お伊勢

エ 右近

オ おかみさん

